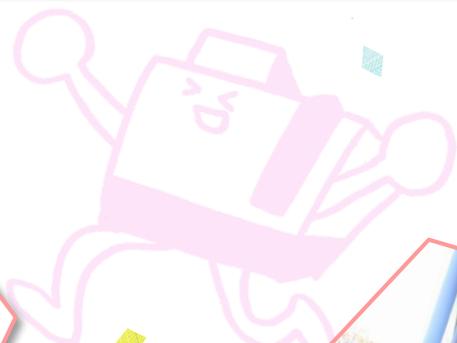


東京大学  
駒場図書館

# 東京大学 駒場図書館 開館15周年 記念誌

**Contents**  
あゆみ・活動・お宝紹介  
館長の図書館への想い  
こまとちゃんのはなし  
など



# 駒場図書館15年間のおゆみ

2017年10月2日、駒場図書館は開館15周年を迎えました。本冊子では、創設以来の歴史や活動をご紹介します。



## 沿革

**1949** 第一高等学校・東京高等学校が東京大学に包摂され「東京大学教養学部」となる

**1969** 東京大学教養学部図書館本館竣工



教養学部図書館  
(左1997,上2002.7撮影)



(2018撮影)

### 駒場博物館

第一高等学校の時代  
ここは図書館でした。  
教養学部図書館時代には、  
第一高等学校の資料が  
この書庫にあり、職員が  
出納していました。

**1996** 新図書館構想決定

**2002.10.2** 駒場図書館開館

教養学部図書館の資料を駒場図書館の3・4階へ  
8号館図書室および同分室の資料を地下1・2階へ統合



駒場図書館の開館直前 (2002.9撮影)

**2004** 東京大学附属図書館の駒場地区拠点図書館となる

**2006** 公式キャラクター「こまとちゃん」誕生



こまとちゃんは建物を  
西側から見た様子を描  
いています

**2015** アジア経済研究所図書館（千葉市）と相互利用に関する覚書を締結

**2017.10.2** 駒場図書館開館15周年

10月に1か月間、15周年記念イベントとしてオリジナルブック  
カバーおよび壁紙画像プレゼント企画を実施  
2018.3-4 開館15周年記念誌（本誌）発行、記念展示を実施



## 歴代館長

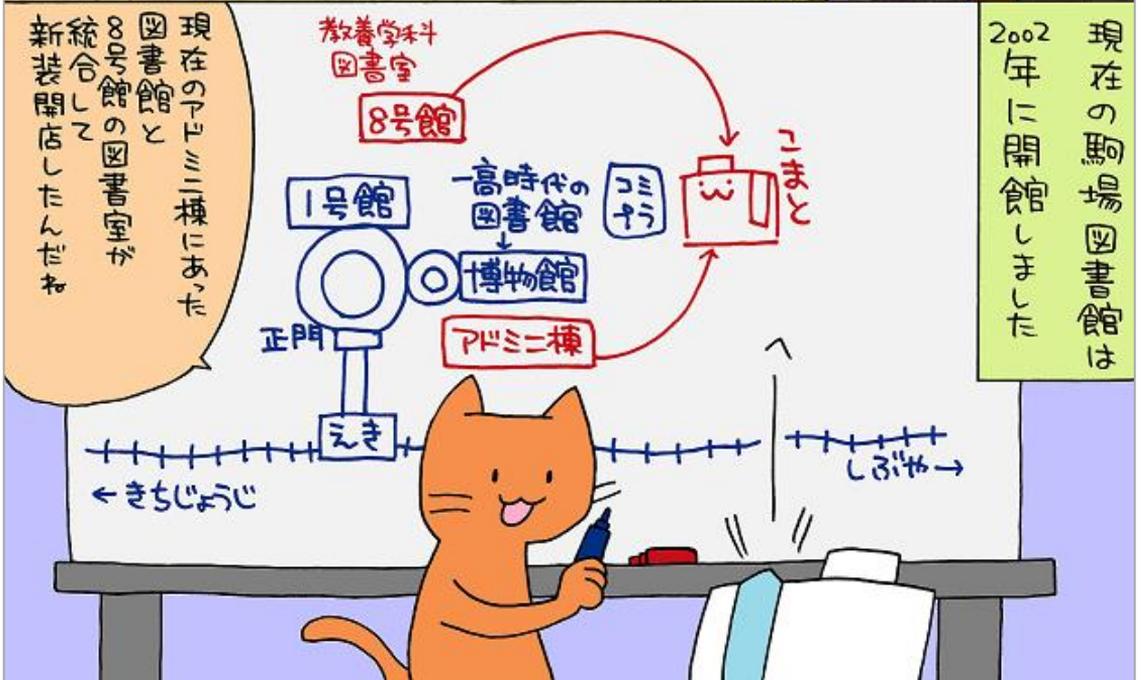
\* 所属研究科は全て大学院総合文化研究科

駒場図書館長			総合文化研究科図書館長		
2002-2003年度 * 教養学部図書館長 から継続	竹内 信夫	超域文化科学専攻	2004-2007年度	鹿兒島 誠一	広域科学専攻
2004-2004年度	木畑 洋一	国際社会科学専攻	2008-2011年度	鍛冶 哲郎	言語情報科学専攻
2005-2006年度	兵頭 俊夫	広域科学専攻	2012-2015年度	橋本 毅彦	広域科学専攻
2007-2009年度	石井 洋二郎	地域文化研究専攻	2016-2017年度	菅原 克也	超域文化科学専攻
2010-2011年度	木村 秀雄	超域文化科学専攻			
2012-2015年度	酒井 哲哉	国際社会科学専攻			
2016-2017年度	田中 純	超域文化科学専攻			

駒場図書館は、  
教養学部の図書館で  
あり、かつ総合文化  
研究科の図書館でも  
あるため館長が  
二名います



# 駒場図書館15年間のあゆみ







# 館長の図書館への想い

## 書物のささやきに耳を澄ます — まだ見ぬ図書館映画のために



田中 純 教授 (駒場図書館長)  
大学院総合文化研究科 超域文化科学専攻

2017年に公開された『君の臍臓をたべたい』（監督・月川翔）という映画を観ました。その重要な舞台となっているのが、主人公の男子生徒が図書委員を務める高校の図書館です。つまりこれは一種の「図書館映画」なのです。わたしにとってとくに忘れがたい図書館映画のひとつは、「壁」が崩壊する以前のベルリンで撮影された、ヴィム・ヴェンダース監督『ベルリン・天使の詩』です。この映画には、国立図書館の閲覧室で読書する人びとの心の声を天使たちが聴き取っているシーンがあります。その天使たちの姿は子供たちにしか見えません。

『君の臍臓をたべたい』では、国語教師となって同じ高校に赴任した主人公が、かつてクラスメイトだった或る女子生徒の姿を図書館の書架の狭間に幻視します。それは早世した彼女が彼にとって忘れがたい存在だからですが、しかし、図書館の書架のあいだにはそんな、ほんとうは眼に見えない何者かの気配がつねに漂っているようにも思えます—この駒場図書館のなかにも。それはそこが書物という、圧倒的に多くがすでに亡くなっている人びとの書き残した言葉の集められた場所だからかもしれません。書物たちのささやきが図書館の細い通路を満たしています。夜遅く、人けもあまりなくなった駒場図書館で調べ物をするとき、そうした微かなささやきや気配をとりわけ身近に感じるものが、皆さんにも時にありはしないでしょうか。

題名の奇妙さに惹かれて何の気なしに見た映画が奇妙なほど記憶に残るのは、それが独特な図書館映画だったからなのでしょう。女生徒は主人公に「がんばって探して見つけたほうが嬉しいでしょ。宝探しみたいで」という言葉を残します。書物との出会いの真髄のようなものが、この台詞に凝縮されていることに気づかされます。もちろん、図書館では通常、図書館員の皆さんの尽力によって目録が整備され、秩序だった配架がなされているからこそ、わたしたちは

書物を有効に利用できるわけですが、図書館の魅力はまた、「宝探し」のような発見の喜びにもあるように思われてなりません。あらかじめOPACで検索し、あるべき場所にあった本を借りるだけではつまらない。一冊一冊の書物が語りかけるささやきに耳を澄ましながら書架のあいだをさまよひ、勤に導かれるままたまた手に取った書物をふと読み始めて思わず引き込まれる経験こそが、駒場図書館のような開架式図書館ならではの醍醐味ではないでしょうか。

どんな書物も一種の投壘通信—書簡を入れて栓をしたガラスのボトルを大海原に投げ、どこにたどり着くとも知れぬまま送り出された手紙です。図書館とは、ときには何世紀も前の遠い時代に海へと放たれた、そんなボトルがおびただしく漂着した浜辺でしょうか。そのなかに封じ込められた書簡というメッセージはいつの日にか読まれること、それを読むべきひとのもとに届くことを辛抱強く待っています。あの映画には、そんな投壘通信もまた描かれていました。

書架に並んだ書物のいまだ誰も聴き取っていないささやきに耳を傾けること、投壘通信の未知のメッセージを発見すること—そんな「宝探し」のプロットを考えながら、駒場図書館を舞台とした、いままでにないような図書館映画を夢想しています。





# 館長の図書館への想い

## わかれて末に — 駒場図書館と参考図書



菅原 克也 教授（総合文化研究科図書館長）  
大学院総合文化研究科 超域文化科学専攻

駒場図書館が竣工・開館して15年になるという。すこし思い出を書こう。

駒場図書館の前身は教養学部図書館と教養学科図書室である。教養学部図書館は現在のアドミニストレーション棟の建物。教養学科図書室は現在の八号館の1階と2階にあった。教養学科図書室は長らく2階部分のみだったが、のちに八号館を増築した際、1階部分に書庫を拡張した。ちょうど今バリアフリー支援室のあるあたりである。

増築後も入口は2階のまま、ノブを回して木のドアを開けると、すぐ目の前に貸し出しカウンターがあった。教養学科生と大学院生及び教員（当時は教官といった）向けの図書室だったから、利用者の数は限られる。カウンターの上には各自の貸し出し簿を収めた分厚いファイルが、クルクル回るスチールの回転棚に収めてあった。本を借りる時には、書庫の本棚に代本板を立て、カウンターで自分の貸し出し簿に手書きで必要事項を書き入れる。著者名、書名、分類番号を確かめつたから、5冊も借りれば記入をおえるのに2、3分かかる。そのあいだカウンターの司書の女性（あのころは女性がほとんどだった）と、ちょっと話をする。在籍期間の長い大学院生だと、それなりに盛りあがることもある。そうやって生まれたロマンスがいくつもあった。

大学院生の身で司書の女性と結婚した研究室の先輩が、かつて駒場にはいた。図書館の虫と言われて、朝から晩まで教養学科図書室で勉強する人だったが、目的はおのずから別のところにあったのかもしれない。

駒場図書館は旧駒場寮跡地、正確には文系の教官研究室があった旧「一研」の建物跡に建てられた。その工事が終盤にさしかかった頃だったろう。当時同じ専攻（超域文化科学専攻比較文学比較文化コース）に属していた国文・漢文学部会の神野志（こうのし）隆光先生に呼び止められた。図書委員として新図書館立ち上げの準備にかかわっている。ついては手伝ってほしいことがあるから、教養学部図書館まで一緒に来てくれまいかということであった。

ここで旧教養学部図書館の建物について説明しよう。私が駒場に入学した1973年ごろ、現在のアドミニストレーション棟の建物は4階建であった。中2階の部分があって、それを1階分に数えたのだと思う。現在の学際交流ホール（当時は視聴覚ホール）は4階にあり、その周りをぐるりと取り囲むように、小さなゼミ室があった。新入生のあいだで人気の高い「全学自由研究ゼミナール」は、多くがこの図書館4階で開講されていた。

だから、図書館が移転して、建物がアドミニストレーション棟として改修されたあと、学際交流ホールが3階になったと聞いた時は、ちょっと妙な気持ちにしたものである。4階のホールを3階まで引下ろした、難工事であった、などというまことしやかな噂まで流れた。

現在の駒場図書館にも同じような話がある。竣工時、駒場図書館は地上5階、地下1階の建物であった。入口は2階。それがある時（2007年4月の年度替りの時）突然、地上4階、地下2階の建物となり、入口も1階に移った。理由は図書館南側の道に下りてみればわかる。矢内原公園の緑につつまれ、日の光をたっぷり浴びる図書館の建物は、見あげれば立派な地上5階建の建物である。南は5階、北は4階、なーに？みたいな話なのである。

本題に戻ろう。旧教養学部図書館には、のちに建て増しの部分が出来た。現在は「保存書庫」と呼んでいる小ぶりの建物である。井の頭線脇の梅林から眺めると外観がよく分かる。



▲ 教養学科図書室（8号館）





▲教養学部図書館

建て増し部分は、本館と一体運用されていたが、1階と中2階は、主に参考図書を備える場所として使われていた。大学院入学後はもっぱら教養学科図書室のお世話になり、教員として赴任したあとも教養学部図書館にはあまり出入りしなかった私は、参考図書の充実に驚いた。心地よい空間で、ことに中2階は落ち着ける場所だった。



▲教養学部図書館 1階



▲同 中2階

神野志先生の話はこうである。現在ここにある参考図書は、新図書館ではスペースの関係で同じフロアに収容することができない。およそ3割は、残念ながら他のフロア、しかも電動集密書庫に収容せざるを得ない。そこで、ここにある参考図書を、新図書館の開架の部分（現在の2階の参考図書のコーナー）に収めるものと、集密の部分（現在の地下1階の集密書庫）に収めるものに仕分けなくてはならない。私は日本語の参考図書はおおよそ振り分けたから、残る部分について手伝ってほしい、とのことであった。わかりましたと答えると、すぐに図書館の棚を見てまわることになった。

神野志先生は上代文学、ことに古事記のご専門で、厳格を以て聞こえた先生である。学生たちの逆評定では不動の「大鬼」。研究にも教育にもきびしい先生として、駒場では有名な方であった。私は、ご専門の研究の一端を拝見し、学者として深く尊敬した。その神野志先生とともに実際に参考図書の棚をめぐりながら、これは可（開架）、これは不可（集密）と、瞬時に判断していかなくてはならないのである。なかなか緊張を強いられる作業であった。

参考図書（レファレンス図書）とは何か。要するに辞書、事典、索引、目録のたぐいである。そんなものは今はウェブ上でいくらでも見られる、と思う向きもあるだろう。それはちょっと違う。まず、ウェブ上では見られない辞書、事典は山ほどある。小ぶりで専門性の高いものほど、この傾向が強い。さらに言えば、文系の学問の場合など、

ウェブ上で見られてその上に実物（紙媒体）が見られるという環境を確保しておくことが重要となる。紙媒体のレファレンス図書がなぜ大事かは、すこし深く研究の世界に入らないと実感できないかもしれない。

神野志先生はどんどん奥の棚へ歩いてゆく。日本語以外というのは、要するに韓国・朝鮮語あり、ロシア語あり、スウェーデン語あり、ギリシア語あり、という世界である。いきなりのことだから、背文字を見てすぐには何の本か分からないものも多かった。神野志先生の鋭い視線を真横に感じながら、それでも何とか作業を進めていった。

あの時の仕分けが、どのような手続きを経て図書委員会の最終決定となったか、今は確かめるすべを持たない。ただ、現在の配架の状況を見ると、神野志先生と二人で下した判断が強く反映しているようにも思う。たしかに乱暴な作業であった。だが、各分野の専門の先生方の意見を集約して、という通常考えられるプロセスを経ていたら、開館にはどうてい間にあわなかったことだろう。

それでも、泣きわかれになった参考図書のことは、ずっと気にかかっている。地下の集密書庫に配架された事典のなかで、あれをあそこに置いておくのはもったいない、と思うものがいくつもある。

現在の駒場図書館は、はじめに構想された新図書館の規模のおよそ半分の大きさである。15年前に竣工したのはあくまで第一期工事。東側に確保してある空き地に、早く二期棟が建てほしいと思う。

その二期棟が完成して、フロアが拡充した暁には、参考図書を再び同じところに集めてやりたい。分かれた（別れた）末に合わせて（逢わせて）やりたい。古歌にもいう。

瀬をはやみ岩にせかるる滝川の  
われても末にあはむとぞ思ふ



◀教養学部図書館  
2007年撮影

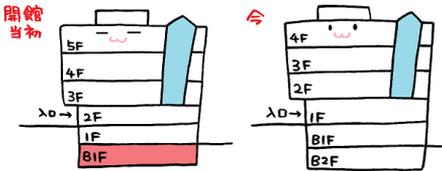
# 統合移転当時のスタッフ回想録

駒場図書館開館の前後、あるいは開館当時と今とでは、どのような変化があったのでしょうか。統合移転当時のスタッフに当時の様子を振り返ってもらいました。



参考掛  
現・情報サービス係

駒場図書館の開館から15年、短いようで移り変わりはあるものです。例えば、開館当時入口やカウンターなどがある所は2階で、地上5階・地下1階と称しており、地下への出入りには磁気カードが必要でした。



10/2の開館に向けた準備中、地下で踊る人がモニターに映っている！と思ったらカードを忘れた業者さんだったということがあり、笑い話ながらも入退室管理には要注意と思った記憶が残っています。図書館周辺が整備されるに伴い、入口のある階は1階と改称され、地下2階となった最下階へもカード無しで入れるようになりました。閲覧・参考などの伝統的な「掛」名も変わり、開館後ほどなく駒場を離れてしまった私などは当時どこにいたのだろう？と戸惑うほどで、記録することの大切さをあらためて感じる今日この頃です。

## 業者さんのみならず...

開館当時、地下1階に出入りするための磁気カードはカウンターで利用者に貸出されていたのですが、ときどき資料を探しているうちに磁気カードをなくして出られなくなる方が…。そんなときは地下1階の監視カメラの前で飛んだり跳ねたりしてスタッフに知らせていたそうです。書庫に閉じこめられたら少し焦りますよね。

閲覧掛  
現・利用者サービス係

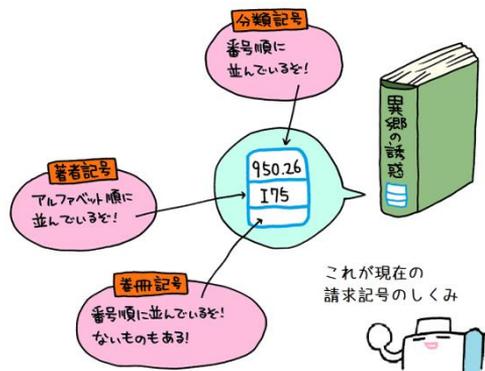
初めて駒場図書館を見た時は、天井も高く窓も大きく、特徴的な斜め窓も相まって、開放感のある現代的な建物だと思ったことを覚えています。床も教養学部図書館はリノリウムでしたが、駒場図書館は防音も兼ねてカーペットになっています。普段は気にされる方もいないでしょうが、見た目も暖かく、居心地の良い雰囲気貢献しているのではないのでしょうか。開館当時は真新しいカーペットに寝転がりたいと思う人もいたようで、学生さんが集密書架の間で寝ていて驚いたこともありました。

開館から15年も経ちましたが、館内を見てもそれほど古びている気がしません。利用者の皆さまが大切に使ってくださった結果だと思います。これからもどうぞ、駒場図書館をご利用ください。



整理掛  
現・図書係&雑誌係

開館にあたって教養学部図書館の請求記号の付け方を変更したことが強く記憶に残っています。変更前は『日本十進分類法』の3桁の分類と3桁の分類内の受入順の番号を組み合わせる請求記号を決めていました。現在の『日本著者記号表』を利用する方法になり受入順の番号管理の煩雑さから解放され、すっきりした気持ちになりましたが、その気持ちとは対照的に変更後の請求記号は、図書の並びが複雑になり、書架整備の時間には「より集中」して取り組んでいたのが懐かしいです。



統合移転当時は、上記の3掛および受入掛（現・図書係&雑誌係）、総務掛（現・総務係）で運営していました。



# 駒場図書館の電子化資料・貴重書

駒場図書館の保存庫・貴重書庫には、古い図書、貴重な資料が所蔵されています。このコーナーでは、普段利用者が目にする事のないお宝の一部をご紹介します。

## 狩野亨吉文書

### ■概要

旧制第一高等学校の校長や京都帝国大学の初代文科大学長などを務めた狩野亨吉（かのう こうきち）の関連文書。書簡、日記、授業ノート等を含め2万点に及ぶ資料群。古書収集家であった狩野の旧蔵書は東北大学や九州大学に「狩野文庫」として収蔵されていますが東京大学のコレクションは書簡類等である点が特徴で、狩野の人となりや夏目漱石、吉野作造、岩波茂雄をはじめとする当時の知識人との交友関係を知る上でも価値のあるものです。



▲狩野亨吉肖像写真<sup>※</sup>  
(第一高等学校校長時代)



▲狩野が残した日記・書簡・メモ類

### ■狩野亨吉とは？

狩野亨吉(慶応1(1865)-昭和17(1942))は、旧制第一高等学校校長(明治31(1898)-明治39(1906))や京都帝国大学文科大学長(明治39(1906)-明治41(1908))を歴任し、また江戸時代の学者志筑忠雄、思想家安藤昌益、経世家本多利明を発掘したことで知られます。

教育者、研究者として知られる一方、春画、春本の蒐集でも名を馳せ、退官後は書画鑑定で生計を立てていたという多才な人物です。

田村 隆 准教授

大学院総合文化研究科 超域文化科学専攻

狩野亨吉は『吾輩は猫である』の珍野苦沙弥先生のモデルとも言われ、香日ゆら氏の『先生と僕—夏目漱石を囲む人々』には狩野亨吉がマンガで登場します。生誕150周年にあたる2015年の秋には、駒場博物館と駒場図書館において安達裕之名誉教授、岡本拓司准教授、丹羽みさと氏らにより記念展が開催されました。

### ■来歴

狩野の没後、弟子の岩波茂雄が所持していたものを八田三喜に託し、第一高等学校同窓会に寄贈されました。昭和44(1969)年に一高同窓会館で再発見され、のちに駒場図書館に移管され現在に至ります。



▲自筆の講義ノート

### ■狩野亨吉文書のこれから

貴重なコレクションである狩野亨吉文書ですが、2002年に『狩野亨吉博士遺蔵文書仮目録』(井上政久、井上佳世子編)が作成されたものの未だ全貌を把握することが難しく、現状では専門家であっても利用するのは容易ではない状態です。現在、比較文学比較文化研究室の田村隆准教授、駒場博物館の折茂克哉助教、立教大学の丹羽みさと助教が中心となり狩野文書の書誌データ作成、撮影および研究が進められています。

この調査・研究によって狩野亨吉文書の全容が明らかとなり、目録や画像データベースの公開によって多くの人々が狩野文書を利用できるようになることが期待されます。

注) 東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 駒場博物館所蔵

2017年度からは科学研究費によって文書の整理作業や内容の分析を折茂克哉氏、丹羽みさと氏、および川下俊文氏ら大学院生・学部生の有志と共に進めており、成果をふまえた画像データベースの構築をめざしています。狩野亨吉の旧蔵書を有する東北大学や九州大学の研究者とも連携しながら、資料からかいま見える狩野とその時代の知の体系を確かめていきたいと思っています。



## 大日本海志編纂資料

### ■概要

明治16(1883)年に農商務省駅遞局から古来船舶調査事業を引き継いだ海軍省が「大日本海志」を編纂する目的で収集した資料約820点。海事史・造船史関係のまとまった資料としては他に類を見ないもので特に水軍書と造船関係資料が充実しています。

### ■来歴

海軍省による大日本海志の編纂が陽の目を見ることはありませんでしたが、蒐集された資料は大日本海志編纂資料として海軍省の海軍文庫に収蔵されていました。これらの資料は敗戦直後に本郷の東京帝国大学に運ばれた後、駒場の第一高等学校に移されました。

そこで日本造船史に造詣の深い須藤利一教授によって調査が行われ、以後、その資料は図学教室（現、情報・図形科学部会）の小佐田哲男教授、安達裕之教授へと受け継がれて、研究・閲覧の用に供されてきましたが、2009年に駒場図書館へ移管されました。

### ■デジタルコレクション

「大日本海志編纂資料」は駒場図書館の貴重書室で保管されていますが、大部分の資料をデジタル公開しています。

駒場図書館Webページ> コレクションからご覧いただけます。

URL <https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/komaba/collection>



デジタルコレクションより、出版・掲載のご依頼が多い人気の資料などを何点かご紹介します。

### ■分類：第七部門 絵画・図巻 | 三 絵図より



▲『征韓之図』 [7-3-09]



▲『九鬼公釜山海船棚之図』 [7-3-29]



▲『蒙古襲来之図』 [7-3-02]

## 秋山真之の海賊戦法研究

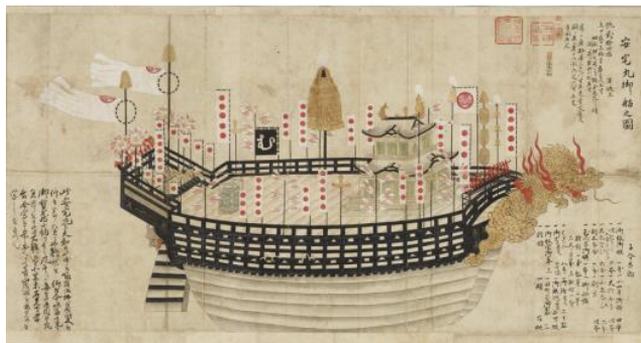
安達 裕之 名誉教授

「日露戦争中、東郷大将の智囊として、機略縦横、鬼才の名を恣にした」海軍作戦参謀秋山真之について、司馬遼太郎は『坂の上の雲』にこう記す。明治33(1900)年にアメリカから帰朝してほどなく胃腸を病んで入院中の秋山大尉を見舞った小笠原長生少佐は、頼まれた海賊戦法の本を旧臣等に尋ね、珍本『能島流海賊古法』を探し出して届けた。本書をむさぼり読んだ秋山は目が開かれたと何

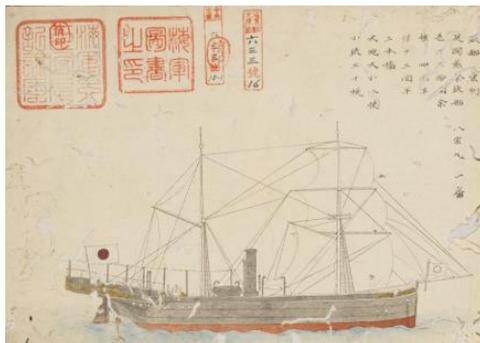
度も小笠原に言い、後に小笠原は日本海軍の戦術は秋山の入院中にできたと言った、と。種本たる小笠原の回顧譚は本の出所を明かさず、ために小笠原が旧唐津藩当主であることに絡めて司馬は出所を潤色した。しかし、小笠原が秋山に草稿を見せ、明治35(1902)年に海軍大学校から刊行した『日本帝国海上権力史講義』第4章「中古ノ水軍」の典拠は、大日本海志編纂資料の水軍書である。この事実が見逃されなければ、話の展開は相当に違っていただろう。むろん、秋山の読んだ本は現存する。



▲『武田信玄軍艦之図』 [7-3-31]



▲『安宅丸御船之図』 [7-3-45]



▲『明治維新当時諸藩艦船図』  
八雲丸一番(松江藩) [7-3-68]

## 駒場図書館と学びへの支援

駒場図書館は新入生が初めて出会う大学図書館です。授業との協働は駒場図書館の重要な活動の一つです。このコーナーでは特にかかわりの深い授業ご担当の先生からのコメントを紹介합니다。

### 初年次ゼミナール

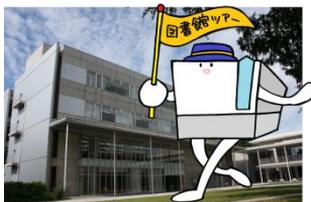
文系1年生必修授業「初年次ゼミナール文科」では授業内での情報検索実習、学生スタッフによる図書館ツアーと検索セミナーを実施しています。この取り組みは初年次ゼミナールの前身「基礎演習」との協働にさかのぼることができます。

また理科1年生必修の「初年次ゼミナール理科」やPEAKコースの“First-Year Seminar”においても授業内外での支援を行っています。

景山 洋平 専任講師

大学院総合文化研究科・教養学部附属  
教養教育高度化機構 初年次教育部門  
(初年次ゼミナール文科担当)

初年次ゼミナールでは、大学における能動的学習への導入として、新入生全員が基礎的な研究訓練を行います。特に文科では、問題設定・資料調査・議論構成について一定水準に達した小論文の執筆が必須であり、私が2001年に東大に入学した時より、前期課程での学びの要求度は遥かに高くなっています。そこで初年次教育部門では「図書館ツアー」を実施し、上級生のスタッフが新入生を案内する形で、資料調査など学業に不可欠の図書館にスムーズに馴染み、文献検索の方法を習得してもらうことを目指しています。4月は熱気に満ちた新入生が多数ツアーに参加して大変ですが、学生スタッフや図書館職員の方々のおかげで順調に運営されています。ツアーを通して、大学に新しく参加した皆さんがより有意義に「東京大学」という場を活用していってくれる様を毎年嬉しく感じながら見えています。



### 全学自由研究ゼミナール 図書館の学び・活用・提案 (こまとちゃんゼミナール)

2017年開講の全学自由ゼミ「図書館の学び・活用・提案」通称こまとちゃんゼミナールではその名の通り図書館の資料やサービスを学びます。2017年度は館内での授業やバックヤード見学、図書の紹介展示まで多角的な取り組みが行われました。

岡本 佳子 特任助教

大学院総合文化研究科・教養学部附属  
教養教育高度化機構 社会連携部門  
(全学自由研究ゼミナール図書館の学び・活用・提案担当)

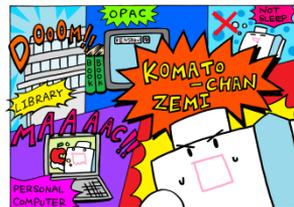
授業ではグループワークを中心に、課題テーマに沿った資料選びや、レファレンス質問と回答のロールプレイ、バックヤード見学などを行っています。特に事典類の使い方やデータベース検索の実習は総合科目やALESS/ALESAにそのまま応用できると受講生から好評です。

構想のきっかけは他授業にて、学生が資料貸出以外にあまり図書館サービスを利用していない状況を知ったことでした。折良く図書館総合展にて「こまとちゃんゼミナール」の野望<sup>\*注</sup>を目にし、駒場図書館スタッフの皆様からの貴重なご協力をいただいて運営しています。

大変僭越ながらこまとちゃんに倣って野望を述べますと、今後ゼミナールが引き継がれ、いつか建設されるかもしれない駒場第2図書館内で実施されることを願っております。

\*編注

2016年図書館総合展・図書館キャラクターグランプリでこまとちゃんが発表した野望「こまとちゃんゼミナールの開設」のこと。詳しくはp.14参照。





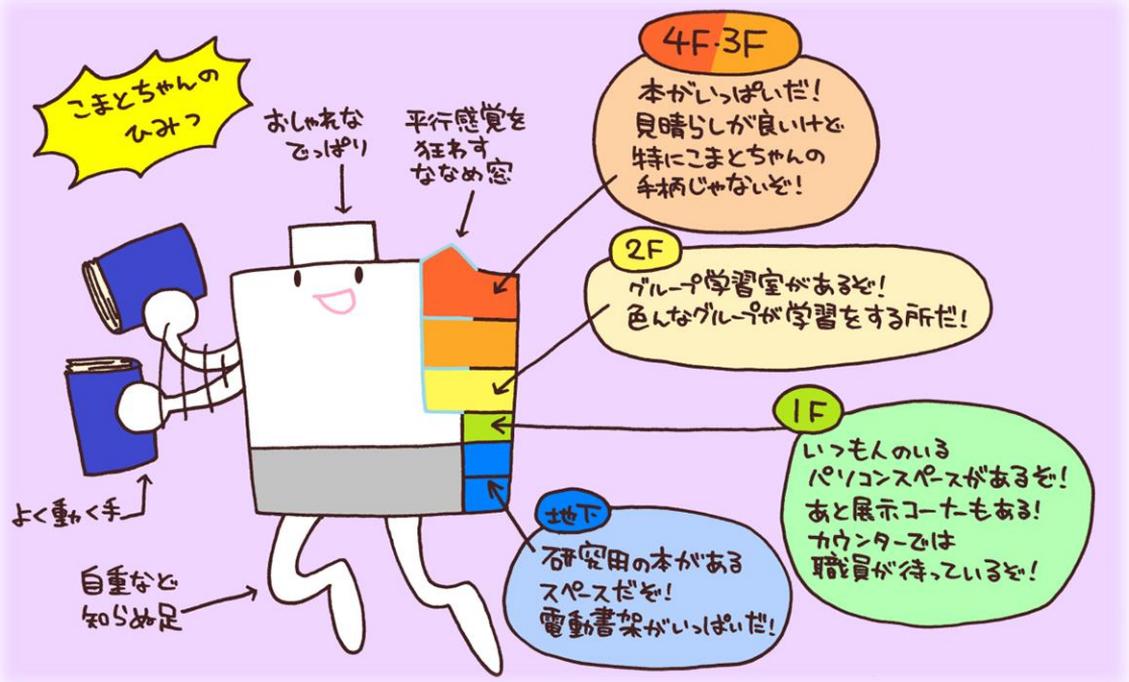
# 駒場図書館公式キャラクター「こまとちゃん」とは

名前は「こまとちゃん」。

2002年10月2日生まれ。

生まれてからずっと、来るべき弟妹（駒場図書館2期棟）を待ち望んでいる。

普段は見えないけれどちゃんと足がある。



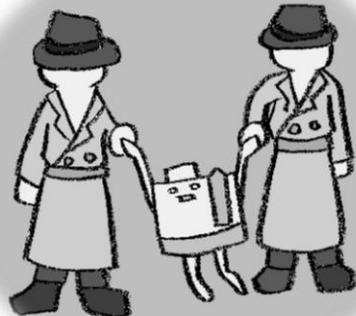
## 元職員 たぐち氏 明かす



Mr. たぐち

駒場キャンパスのどこかでこまとちゃんを見つけたのは、  
確か2005年度のことだったと思います。  
この功績のおかげでわたしは、駒場キャンパスを離れた今でも  
「こまとちゃんの父」と呼ばれています。

最初は秘密にしていたものの、こまとちゃんの発見に魅了されたわたしたちは、その愛らしい姿を「利用案内」と呼ぶ印刷物に載せて盛大に配布したり、ウェブサイトのトップアイコンとして、四角い姿を全世界に知らしめたりしました。このため学内図書館・室に、こまとちゃん存在は割とすぐにばれてしまったのでした。



捕獲されたこまとちゃん





## ▼館内にて

### 汚損展示

駒場図書館では2015年度末から継続して、資料の汚損等に対する注意喚起の目的で展示を行っている。学生たちに資料を大切に使うしてほしいという願いを込めた展示である。



利用者への注意もこまとちゃんの力を借りれば伝わりやすくなる。

### 学生との交流

開館日に絡めた「こまとちゃんウィーク」や、定期試験を終えた学生をねぎらう「お手製グッズ配布企画」など、様々なタイミングでこまとちゃんの魅力を全面に押し出したイベントを開催。



図書館と学生の懸け橋となるべく奮闘する。学生達からも大きな反響があった。



## Twitterにて

@UTokyoKomabaLib

駒場図書館のTwitterアイコンとして君臨するこまとちゃん。イラストとともに発信されたツイートは多くの人の目を引きつけている。



長期貸出の期限日→返却を促すツイート

## 学内広報にて

地道な活動が認められ、2016年2月 学内広報の表紙を飾った。ゆるキャラとして学内での地位を確立した瞬間である。



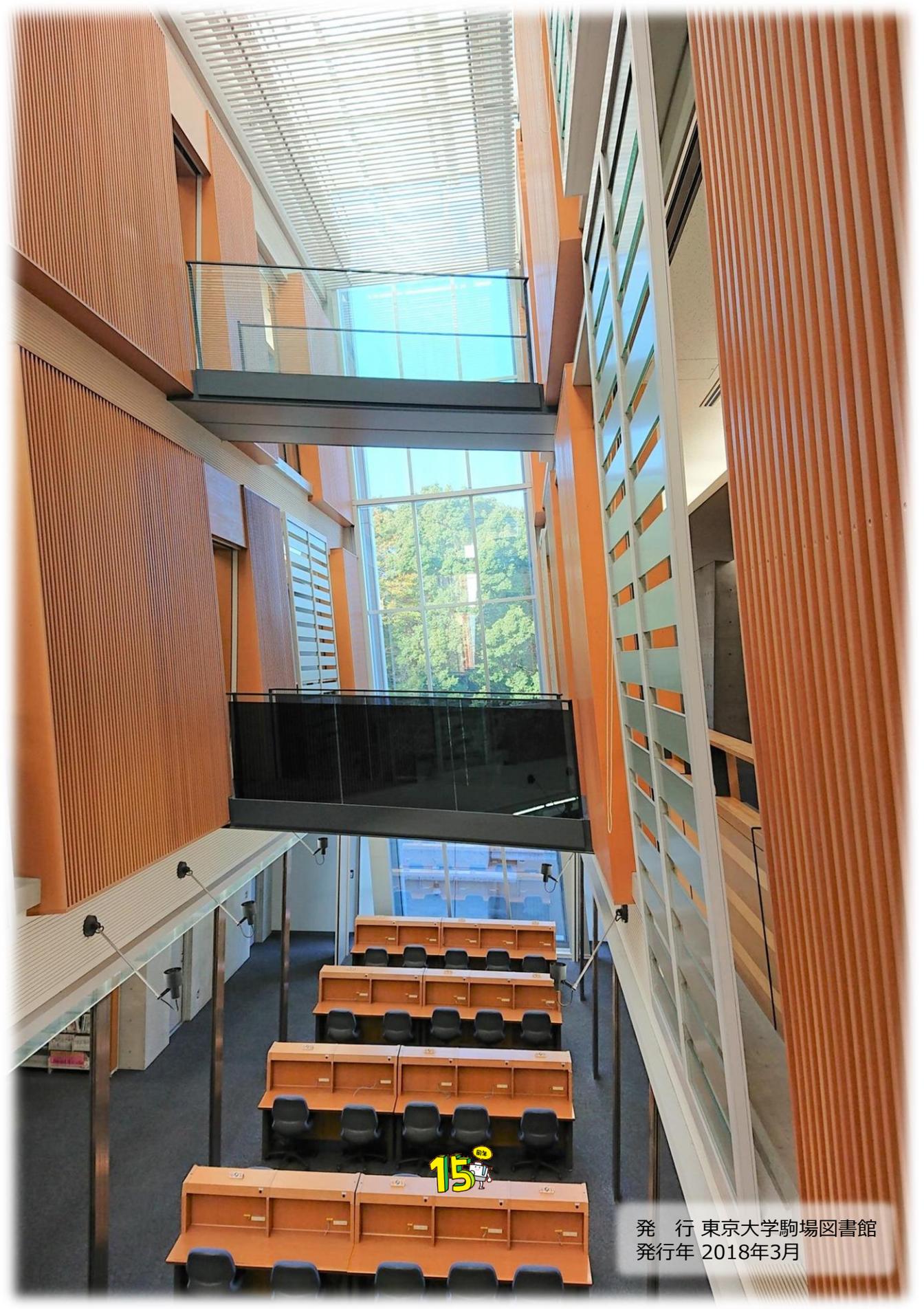
学内広報 no.1478 表紙→

## 図書館総合展にて

図書館総合展のイベント「図書館キャラクターグランプリ」に2015年から3年連続で参加。その全てで入賞を果たした。2016年はポスターセッションでもこまとちゃんの活動を報告し、優秀賞を受賞。学外へも広くこまとちゃんの名を轟かせた。



※図書館総合展：全国の図書館や関連企業が集う図書館界のお祭り



15

発行 東京大学駒場図書館  
発行年 2018年3月